

## 経 済 情 勢

### 国 内

国内最終需要が着実な増加を続ける一方、輸出も引続き高水準で推移しており、こうした中で、生産・出荷は増加基調を持続している。

設備投資関連指標は、引続き増加傾向にあり、個人消費関連では、乗用車販売の伸び悩みはあるものの、百貨店売上げは底固い伸びを続け、また暖房器具等冬物商品の売行きもおおむね順調な出足をみせている。この間、住宅着工戸数は引続き前年を上回ったが、公共工事請負額は前年並みの水準にとどまった。

10月の商品市況をみると、建材が下落したものの、非鉄、食品が反発したほか石油も続伸した。この間、10月の卸売物価は、電力の夏季割増料金適用期間終了の影響を主因に低下した。一方、消費者物価(東京)は、生鮮食品の続騰等から上昇をみたが、前年比では落ち着いた動きを持続している。

金融面をみると、9月のマネーサプライ前年比伸び率は、前月に比べ幾分上昇し、銀行貸出約定平均金利は低下傾向を続けた。また、10月の公社債市況は引続き上伸基調をたどった。

9月の国際収支をみると、貿易収支が輸入の減少を主因に黒字幅を拡大したことに加え、貿易外収支の赤字幅も幾分縮小したことから、経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は前月を大幅に上回った。また、長期資本収支は、本邦資本の流出超幅縮小を主因に、前月を下回る赤字幅にとどまった。

円相場(対米ドル直物相場)は、10月中旬まで下落した後、米国金利の軟化等から反発し、結局ほぼ前月末並みの水準で越月した。

#### 生産・出荷は引続き増加基調

9月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷はそれぞれ-0.7%、-2.1%の減少となったが(前年比+9.0%、+5.6%)、7~9月通計では、+1.6%、+0.9%と引続き増加基調にある(4~6月は+2.8%、+1.4%)。

\* 以下増減率はとくに断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別生産、出荷動向をみると、一般資本財(電子計算機、通信機械、繊維機械)の生産、出荷が前月減少のあと増加、建設財の出荷が横ばいとなったほかは、生産財(石油化学製品、板紙)、耐久消費財(小型・二輪自動車)、非耐久消費財(揮発油、灯油)では生産、出荷とも減少をみた。

この間、生産者製品在庫(速報)は7ヵ月連続増加のあと-0.9%と一服となったが、在庫率は上昇した。業種別にみると、石油製品(ナフサ、C重油)、鉄鋼(鋼管類、冷間仕上鋼材)、輸送用機械(小型自動車、トラック)、電気機械(エアコン)で減少をみたものの、一般機械(事務用機械、金属加工機械)等で引続き積増しが行われたほか、紙・パ(板紙)、化学(石油化学製品)等では、小幅ながら依然積上り傾向が続いている。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、9月の機械受注額(船舶・電力を除く民需)は、-7.9%と減少、7~9月通計でも-3.5%と前6四半期増加のあと反落したが、前年比では高水準の伸びを続けている(7~9月+16.1%、4~6月+22.1%)。一方、建設工事受注額(民間分、速報)は-11.2%と前2ヵ月増加のあと反動減となったが、7~9月通計では+16.2%の大幅な増加となった(4~6月-4.1%)。

9月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、貸家の好調持続や持家の持直しを背景とする民間資金分の増加を主因に、+3.8%と3ヵ月連続して前年水準を上回った(7~9月通計+4.8%、4~6月+8.3%)。

個人消費関連では、全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、8月一服(+2.3%)のあと、9月は涼気到来に伴い秋物衣料が好伸したこともあって、+7.4%と伸びを高めた(7~9月通計+5.3%、4~6月+4.5%)。10月入り後の都内百貨店売上高も、底固く推移している模様である。10月の耐久消費財の売行きをみると、乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は-2.5%と4ヵ月連続で高水準の前年を下回り(7~9月通計-12.7%、4~6月+7.8%)、VTRの売行きも一服気味となったが、エアコン(冷暖房兼用)、ファンヒーター等季節商品が順調な出足を示している。

この間、10月の公共工事請負額(前年比)は、-0.2%とほぼ前年並みの水準となった。

9月の雇用動向をみると、完全失業率(2.77%)、有効求人倍率(0.64倍)はともに前月比横ばいとなったが、常用雇用が+0.1%の微増を示したほか、所定外労

働時間も前月一服(-0.8%)のあと +0.7%と増加した(7~9月 +0.4%、4~6月 -0.1%)。

#### 物価は引続き安定基調

10月の商品市況をみると、一部での安値受注が響いて建材(生コン)が大幅下落をみたものの、海外相場高を反映して非鉄(アルミ)、食品(大豆)が反発したほか、減産による需給引締り等から石油(C重油)も続伸したため、全体としては強含みとなった。

10月の卸売物価は、輸入物価が為替円安の影響から前月に引続き小幅上昇となったものの、電力の夏季割増料金適用期間終了による値下りを主因に国内物価が下落したため、総合では -0.3%の低下となった(前年比 +0.7%)。

10月の消費者物価(東京、速報)は、生鮮食品が果物の季節的な値上りを主因に上昇したほか、冬物衣料の高値出回りもあって +0.8%と前月(+1.5%)に引続き上昇をみたが、前年比では +2.5%と依然落着いた推移をたどっている(前月、同 +2.7%)。

#### 公社債市況は引続き上昇

10月の金融市場をみると、銀行券は7,036億円と10月としては既往最高の還収超(前年同1,263億円)となり、月中平均発行残高(前年比)も +3.6%と前月(+4.5%)を下回った。一方、財政資金は一般財政の受超幅が前年比縮小したほか、国債発行純増額の減少もあって、全体では13,308億円と前年(18,799億円)をかなり下回る揚超となった。この結果、その他勘定と合わせた月中資金不足額は4,767億円(前年同16,572億円)にとどまり、日本銀行は貸出の実行等によりこれを調節した。

この間コールレート(無条件物)は、中旬まで銀行券の大幅還流に伴う資金余剰地合を反映して軟化したが、月末にかけて小戻し、結局月中では0.125%の下落となった(月末水準6.25%)。一方手形レート(2ヵ月物)は、中旬までほぼコールレートと同様の推移をたどったが、月末接近とともに年末の資金繁忙を織込むかたちで上昇、結局通月では横ばいとなった(月末水準6.3125%)。

9月のマネーサプライ( $M_2 + CD$ 平残、前年比)は、期末を控えた金融機関の預金吸収積極化等から +8.1%と前月(+7.7%)に比べて幾分上昇した。9月の銀行貸出約定平均金利(都銀、地銀、相銀平均)は、 -0.016%と引続き低下傾向をたどった。

10月の公社債市況は、米国長期金利の大幅低下を眺めた一部金融機関等の買入

れ積極化を主因に、月中ほぼ一貫して上伸基調をたどった。こうした状況下、長期国債の応募者利回りにつき、9月債以降3ヵ月連続で引下げが決定された(11月債以降利回り7.05%)。一方株式市況も、国内投資家の買進みをうけてほぼ通月上伸し、東証株価指数は前月末比+37.71の860.44で越月した。

#### 経常収支の黒字幅は拡大

9月の国際収支をみると、貿易収支(季節調整後)は、輸出が前月に引続き減少したものの、輸入が前月までの原油大量入着の反動減を主因に大幅減少となったことから、黒字幅を拡大したうえ、貿易外収支の赤字幅が幾分縮小したこともあって、経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は、30.4億ドルと前月(18.2億ドル)に比べ大幅に拡大した。一方、長期資本収支は、外国資本の流入は減少したものの、本邦資本の流出超幅が縮小したことから、全体では21.9億ドルと前月をさらに下回る赤字となった。このため基礎的収支(貿易収支季節調整後)は6ヵ月振りに、また総合収支(同)は8ヵ月振りにそれぞれ黒字を計上した。

9月の輸出(通関、ドルベース)は、-0.6%と減少し、この結果、7~9月通計でも-1.0%の減少となった(4~6月+4.3%)。一方、数量ベースでは+2.0%増加し、7~9月通計では+1.9%の増加となったが、船舶の落込みや米国向け乗用車の船積み前倒しの反動などから、これまでに比べ増勢は鈍化した(4~6月+4.7%、1~3月+6.0%)。当月の動きを品目別(数量ベース)にみると、自動車、船舶、テレビ等が減少したが、ラジオ、合繊糸等が増加した。

9月の輸入(通関、ドルベース)は、前月までの原油大量入着の反動減を主因に-16.0%の大幅減となったが、7~9月通計では+1.6%と4~6月(+1.9%)に引続き増加した(数量ベース、7~9月通計+3.4%、4~6月+2.2%)。

なお、10月の輸出入(通関、ドルベース)は、それぞれ+3.7%、+8.4%となった(数量ベースは+3.9%、+4.1%)。

10月の円相場(対米ドル直物相場)は、月初から中旬まで米国経済に対する評価の高まりを背景とするドル買いの動きにつれて軟化し、一時は250円台をつけたが、月末にかけては米国金利の軟化等から反発し、結局ほぼ前月末並みの水準で越月した(月末水準245円30銭、前月末比10銭の円高)。

(昭和59年11月16日)